

## 2期生39名入学。あわせて90名で後期がスタート

10月1日に2期生が39名入学し、後期の授業が開始されました。現在の受講者数の現況は次の通りです。

	2018	2019
1期生 2018年度 入学者数	54 女 17 男 37	51 女 16 男 35
2期生 2019年度 入学者数	—	39 女 18 男 21
合計	54	90

平成30年度の後期に入学した1期生54名のうち、3名は、2019年度前期をもって修了されました。それぞれ、所期の目的を達成された方、家庭の事情による方、受講を契機に新たな学習課題を発見されて修了された方でした。その中から、所期の目的を達成された三宅徹治さんの手記を裏面に掲載しましたのでご参照下さい。

三宅さんは後期、前期あわせて7科目を受講されました。選択された科目は、歴史、自然、心理、健康、国際関係など様々な分野をわたっており、ご自分の課題にアプローチされました。

他の受講者の方々の中にも、新しい学習課題の発見によって、大学院進学など次の学びへ向けて活動を開始されている方もいます。

受講科目数では、1科目が最も多く、次に2科目選択となっています。1期生では半期に4科目を受講された方が延べ5名いました。

延べの科目数としては、1期生、30年度後期が80科目、元年度前期が86科目、元年度後期が75科目です。2期生は元年度後期62科目となります。平均しますと1人1.6科目受講していることとなります。

## College Episode

8月29日、UUカレッジに学ぶ受講者相互の親睦を図ることを目的として、受講者の自主的な交流組織「UUカレッジの会」が設立されました。今後、会員有志による研修会、勉強会、親睦会など開催する予定です。会長に田中幸男さん、副会長に新見徹さん、会計に入江文乃さん、監事に大島和枝さん、丹生英昭さん、関澤美智子さんが就任しています。宇大側も天沼実ディレクター以下、コーディネーター、メンターが顧問に名前を連ねています。



設立の趣旨を説明する田中さん



設立総会直後の懇親会の様子。

懇親会には、天沼ディレクター、廣瀬コーディネーターが参加して、受講者との懇親を深めました。

## 1期生修了者の手記

# アクティブ・ラーニングって何だ

UUカレッジ 三宅徹治

社会に出てから宇都宮市関連の委員会や研修会に参加して、実に多くのワークショップが行われているのに驚きました。1960年代に教育を受けた私には経験のないものでした。「学生の受講成果は講師の知識を上回ることにはない。教える者は、講義の何倍もの準備をせよ！」というのが常識でした。そんな感覚の私は、ワークショップはメンバーのレベル以上のものは生み出さないと考え、その有効性に疑問を持っていました。

調べてみるとワークショップのベースは、2012年中央教育審議会答申を受け、大学に本格的に導入されたアクティブ・ラーニング(※)にあるということが分かりました。

今回、UUカレッジに参加する機会を得て、アクティブ・ラーニングが大学のなかでどのように機能しているのかを体験したくなり、特に実践されているという基盤教育を7科目受講しました。科目の半分くらいは一方通行の従来型（私にはすんなり入ってきます）でしたが、残りはワークショップや毎回講義の最後に自分の意見を述べるリアクションペーパー提出といったアクティブ・ラーニングらしい形態でした。

ワークショップに参加して、学生が短時間に自分の意見をまとめ発表する姿に驚きと頼もしさを感じました。もちろん基礎となる知識は必要ですが、常に自分としてこの課題をどう捉えるかと反芻する学習法は、イノベティブな人材を育てるとの期待がもてました。

アクティブ・ラーニングをより機能させるための学生姿勢としては、地球温暖化対策の国際会議で行われた「タラノア対話」の3つの視点が有効だと考えます。それは、①我々はどこにいるのか。②どこへ行きたいのか。③どうやって行くのか。です。

いまや世界的潮流であるSDGsは、今、持っている知識や資源を総動員して社会課題を解決しようとするもので、従来型の教育では対応しきれないものだとも感じました。

1年間という短い時間でしたが、若い学生と机を並べ、アクティブ・ラーニングを体験し、未来に希望が持てた気がしました。ありがとうございました。

注※ これは、中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」の中に出てくる言葉であり、大学教育の在り方について使われる用語でした。答申では、次のように記されています。

「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。」

宇都宮大学の全てのシラバスには、アクティブ・ラーニングの度合いを示す指標(AL度)が設けられており、積極的に進められています。(注は、カレッジ事務局)



(写真は、7月6日の中間ふりかえりの際に、学びの成果を発表される三宅徹治さん)

## 同志との出逢い、語り合い、つながる心地よさ

### 中間ふりかえり(2018年12月15日)実施

12月15日(土)13時からいつもの峰町5号館5C21教室で50名が参加して、中間ふりかえり会を実施しました。カレッジ事務局では天沼、橘川、廣瀬が担当しました。

今後の日程説明やアンケートのあと、受講者は5人1グループに分かれて、①簡単な自己紹介②お互いの授業の様子③来年度前期の受講予定科目などを順に話しをしながら、相互の交流を深めました。その後、グループでどんな話が出たのかを発表していただき、交流を深めました。受講者の方々にふりかえりの感想を書いてもらいました。

情報交換は大切だと感じた。他の参加者の考えもわかり良かった。経験の交流は驚きと共感を与えた。多様な受講者がいて、意見交換できて良かった。1人で受講しているので交流できて良かった。このような機会があればうれしい。他の授業の情報が聞けて参考になった。有意義な時間でした。貴重な情報を聞くことができた。交流の場の提供は良いアイデアだと思う。次回の選択に生かしたい内容でした。学びは生の原動力ということがわかった。他の講義の内容を知ることができた。思った以上に他の受講者がまじめで努力していることがわかった。メンバーの大半が前向きで積極的であり刺激を得た。地域に役立てるという気持ちが湧いた。同じ目的で学ぶ仲間という気持ちが持てた。他の受講者の思いや違いなどを学ぶことができた。

——— 受講者の感想から ———

## College Episode

■地域デザイン科学部の石井大一郎先生の「まちづくり論」。カレッジ受講者7名は今期で最も多い科目です。地域デザイン科学部3学科の学生の大半が受講する科目ということもあって、狭い教室は学生でいっぱいですが、学生との交流を進めながら授業が展開されています。授業では歴史や理論だけではなく、多様なゲスト講師を招いて授業が立体的に構成されています。まちづくりという現場感覚を大切にしながら、受講者の経験をふりかえることができる授業です。7名の受講者同士の交流も盛んで先生を招いての忘年会も開催しました。■

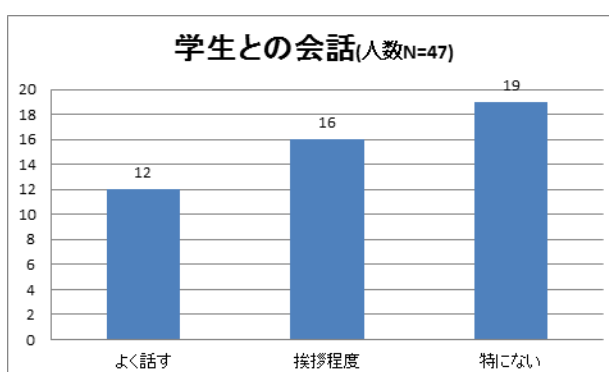
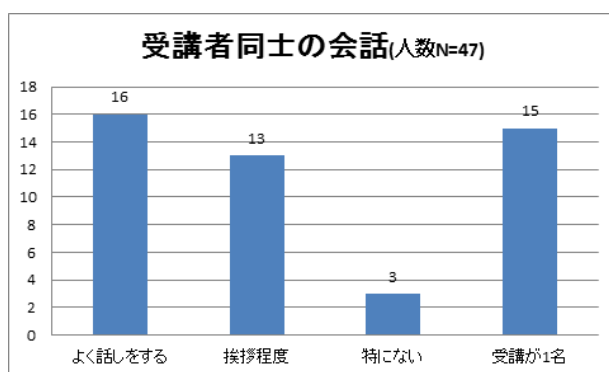
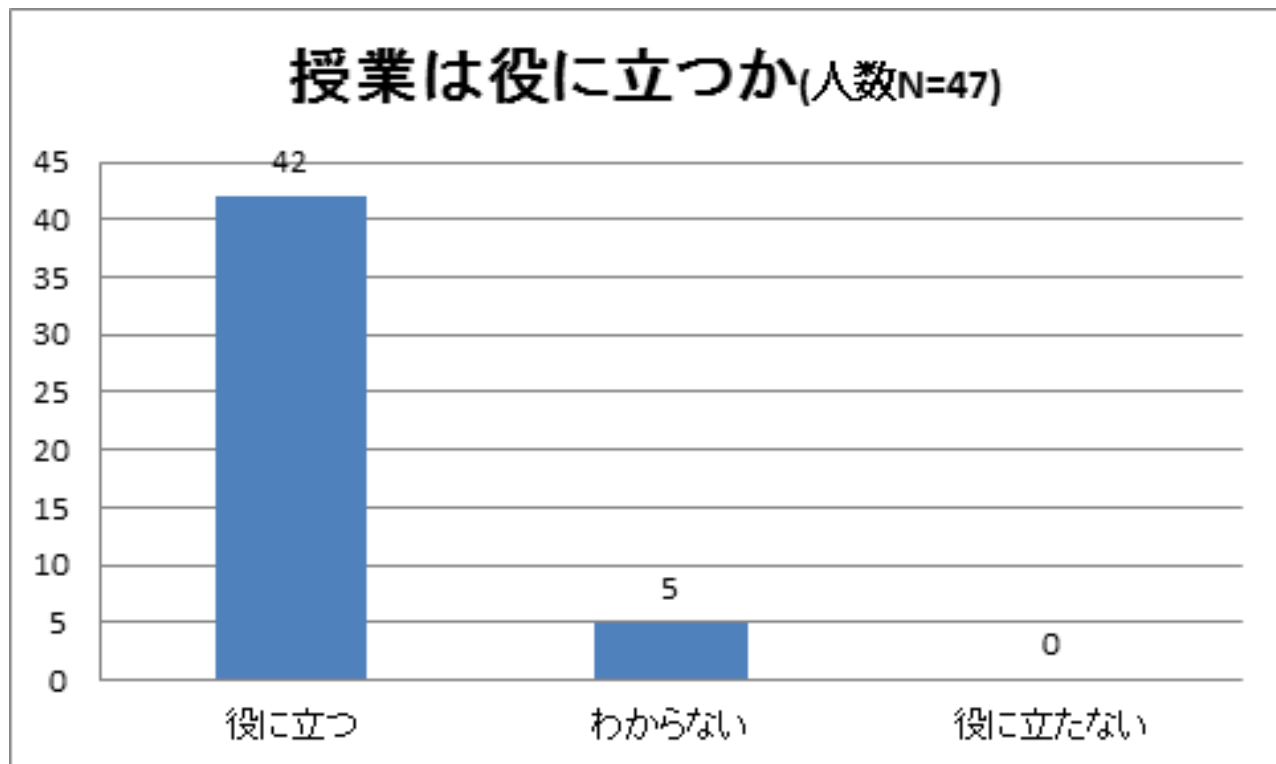
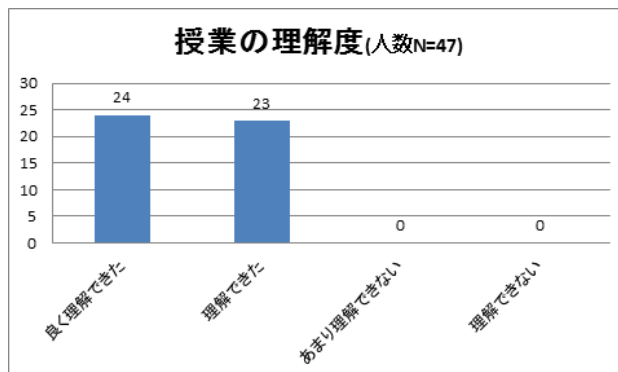
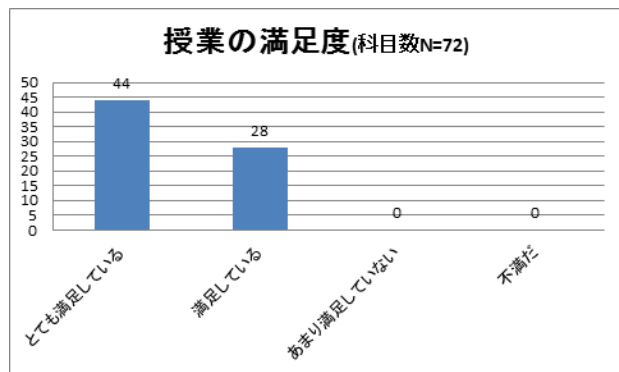


■同じく地域デザイン科学部の大森玲子先生の「食物科学」は、学生も20名以下の少人数授業。カレッジ受講者は3名。大森先生の朗らかな性格と身近な題材を取り上げた授業に受講者の方々も魅了されています。

毎回スライドでの丁寧な授業だけでなく、社会人のカレッジ受講者にも細やかな配慮をされています。授業終了後は自主的に図書館に出向き調べ物をするなど学習意欲も喚起されているようです。また、カレッジ受講者の方々がごぼうや大根などを使った昭和の香りのする料理をつくり、持ち寄りみんなで試食するなどあっという間に時間が過ぎる授業のようです。■



## 2018/12/15中間アンケート調査報告(回答者47人)



12月15日の中間ふりかえりの際に集約したアンケート調査の一部を掲載しました。全ての受講者が授業を理解し、満足し、かつその内容は役に立つと感じていることがわかりました。

また、半数以上の方々が図書館を利用しており、指定された教科書も購入していました。

また、別のデータでは、54名の受講者中、公開講座の受講経験者は25名(46.2%)でした。

受講者の高い満足度は、本学教員の質の高い調査研究に裏付けられた理解しやすい授業がこうした評価につながったものと思われます。受講者の高い学習意欲が背景にあるものと考えられます。